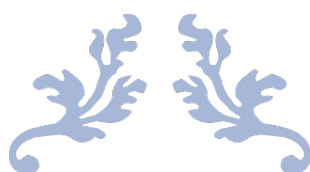

ティーチング・ポートフォリオ



臨床に強い薬剤師の養成を目指して Ver.3



湘南医療大学薬学部

加賀谷 肇

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学

所 属 薬学部医療薬学科

名 前 加賀谷 肇

作成日 令和7年5月2日

1. 教育の責

薬学部開設してこれまで担当した科目は、

- ・薬学入門Ⅱ(薬と病気の科学):必修、1年前期
- ・早期臨床体験実習:必修、1年前期
- ・医療薬学チュートリアル演習Ⅰ:必須、1年後期
- ・調剤学:必須、3年後期
- ・臨床栄養学:選択、4年前期
- ・インターンシップ実習:選択、4年～6年次
- ・実務実習事前学習:必須、Ⅰ、3年後期・Ⅱ、4年前期・Ⅲ、4年後期
- ・薬物治療学Ⅴ:必須、4年後期
- ・後期臨床体験実習:必須、5年後期
- ・腫瘍生物学:選択、6年前期

また、入学前教育、入学後のオリエンテーションにおいて本学が目指す薬学教育の特徴の一つとして臨床一貫型教育をあげ、臨床に強い薬剤師を育てることを大きな柱としていることを示しております。

入学してすぐにもシナジーゲームやワールドカフェ方式の対話等を通して人とのコミュニケーションの仕方や自身の医療についての考え方を持つことの重要性を導入教育として行っております。その他、病院薬剤師の仕事や将来のキャリア支援に関する紹介講義も担当しております。

学務分掌としては、入試委員会、共用試験実行委員会、実務実習委員会、キャリア支援委員会を担当しております。

大学入試、薬学共用試験においてはOSCE実施に向けての大学内の計画・準備また5年次からの病院・薬局実務実習に向けての準備及び環境整備も順次進めております。また、4年次から選択科目としてシラバスにあるインターンシップ実習が始まり、4年生や3年生も多数参加しております。そして進路・就職支援と繋げていくことがこれからの責務と考えております。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

これまでの薬学教育は、歴史的にも創薬を中心にしたサイエンスベースの教育中心となる傾向にありました。しかしながら社会が求める薬剤師には、薬が投与されるときの情報提供、その後のモニターや指導を通して患者、医療者にフィードバックする能力が求められております。すなわちサイエンスとコミュニケーションを図るためのアートのマインド

の醸成も重要になってきました。従来の薬学教育での問題点は、医療を教えることができる教員が少ないことが大きな問題点でありました。臨床は臨床に始まり臨床に帰すという事が長年病院薬剤師としての臨床経験を通して学んだことであります。

今日においても薬学教育現場は一般的に、基礎系教員が8割で臨床系教員が2割くらいの比率です。しかしながら社会が求める薬学や薬剤師はモノからヒトへの貢献が期待されております。本学は医療系の大学だからできる薬学教育の新しいコンセプトとして「臨床に強い薬剤師の養成」を掲げた次第です。基礎科学、医療薬学、衛生薬学[※]及び、臨床経験が豊富な臨床系教員が5割を有するのは本学の強みと考えております。

学生には将来ライフサイエンスのプロフェッショナルとして多くの分野で活躍してほしいと期待しております。

2) 理念をもつに至った背景

私は1975年大学卒業後、当時まだ新設医学部の大学病院に薬剤師として就職しました。戦後初めて新設された医学部でまた、大学病院も新たな医療展開として「患者中心の医療」の実践をスローガンに、当時一般にはほとんど認知されてなかったチーム医療の実践~~を~~を目指しておりました。私は薬剤師が病棟に出向くことのない1987年から薬剤部の臨床業務開発プロジェクトリーダーを命じられ、プロジェクトメンバー5人で全国に先駆けて病棟薬剤師業務のパイオニアとして、チーム医療の実践と厚生省(当時)のモデル病院として薬剤管理指導業務(臨床における薬剤師業務)に保険請求のフィーを付けて頂けるようになり、薬剤師の臨床業務として定着しています。1989年に~~メディカルスタッフ~~としては初めて海外留学が認められ本場のクリニカルファーマシーサービスを学ぶため、米国ミシガン大学病院、ケンタッキー大学病院にて栄養管理チームでチーム医療の実地指導を受け、そのノウハウや薬剤師の業務マネジメントの仕方など多くのことを学ぶことができました。その後、地域中核病院の薬剤部長として臨床薬剤師の育成と病院への経営貢献などトータル38年間病院薬剤師として自己研鑽、人材育成に取り組みました。医療現場にいていつも感じていましたことは、薬学教育がもっと変わる必要があるということでした。母校の臨床薬理学教授として着任し、薬学教育現場で6年間臨床薬学教育に従事し、本学薬学部設置準備室で約2年、さらに開設して5年が経過しました。社会が求める薬剤師を育てるには医療現場と薬学教育がもっと密接な関係でなければならないというのが、臨床に強い薬剤師を養成するための基本理念であります。

3. 教育の方法・戦略

薬学部では、学位授与方針を達成できるよう、以下の方針に基づき教育課程を編成・実施しています。

(1) 低学年において、大学への導入教育、一般教育科目に加えて早期体験学習などを履修高学年に向けてより高度な専門科目が増えていくようにカリキュラムが編成されています。他大学にな
い臨床一貫型教育を実施するため、基礎系教員と臨床系教員が連携したチューター制度を行って
いるので、教育のベクトル合わせができております。

(2) 必要とされる高度な知識と技能・態度の修得だけでなく、倫理観醸成のための教育、4年を
通して人間形成のための教育を展開し、コミュニケーション能力の修得や課題発見・問題解決能力
の醸成を重視する教育課程を編成して対人教育に力を入れております。

(3) 学修成果の評価は、学部の定める成績評価に関する規程及びシラバスに明示された 教育方法、
評価方法に基づき、小テスト、試験、レポート、実習評価等により行い、授業評価アンケート結果等
を活用して教育効果の向上につなげていきます。

・私自身の行っている講義では、講義の中で10題の問題を要所に織り込み、その回
答の解説を通して学生が課題の解決の方法について理解が深まるよう工夫しております。

・課題を学生に与えてレポートで返答させ、添削して評価する方法も進めていきます。
自身が担当する本格的な講義・実習は主に3年後期から始まるので、学生の対応能力を高め
ながら計画を評価していきたいと考えております。

・人間形成のための教育を全学年にわたって行います。

・生涯学習講座や学会への参加などを通して自己研鑽の意欲を高める教育を行いたいと思
います。

・実習や卒業研究などでの後輩の指導を通して後進を育成する意欲と態度を培う教育を
行います。

4. 学習成果

学修成果の評価は、学部の定める成績評価に関する規程及びシラバスに明示された方法、
評価方法に基づき、小テスト、試験、レポート、実習評価等により行い、授業評価アンケート結
果等を活用して教育効果の向上につなげていきます。

具体的な例として

1) 臨床に強い薬剤師を育成するための意欲を学生に伝えるため、私自身の臨床体 験談や、
臨床薬学に対する思いをミニレクチャーや入学前教育などで行い、その成果を確認すべく感
想文やコメントから評価を行っています。

2) 教育の成果を日本薬学教育学会で、基礎系教員・臨床系教員の共同研究で薬学部開設
以来毎年発表を行っています。

3) 薬学教育における本学のここまでの歩みを論文としてまとめております。

5. 改善のための努力

本学の実務実習は、これから1期生の5年生が薬局・病院実習にそれぞれ11週間ずつ実習
を行い、その合間で卒業研究を推進してまいります。

- 1) 事前実務実習の人的・設備的課題は会議を通して解決し、薬局・病院実習においては、職能団体や病院実習施設と調整を図って行きます。
- 2) 実務実習における教員による臨地教育の仕方についても具体的検討を行い、**今年度からグループ病院3施設で、指導薬剤師と共に**行います。

6. 今後の目標

プロジェクト学習、ポートフォリオ、コーチングは、知識創造型の時代の新しい教育として「意志ある学びの実現」へと注目されています。これらは、薬剤師育成と薬剤師の新しい仕事の広がりにも期待されています。

- 1) 自身の今後の短期目標としては2024年12月の OSCE 試験は全員合格することができたので、2025年度も**継続して維持**したい。
- 2) 実務実習実施のための実習施設・保険薬局指導薬剤師との連絡会の**定期的開催**。
- 3) 2期生(4年生)以降の実務実習施設の拡充・整備は継続的に進めていきたい。

【添付資料】

シラバス、開発教材、学生アンケート、レポート課題、講義配布資料等は別途示します。